

## プロローグ

僕は東京と横浜で公務員をしていました。と言っても一般的な公務員のイメージと違って、住民票などの窓口業務ではなく、公園や街路樹の専門職公務員として、公園づくりなどに携わっていました。

そもそも、どうしてこの仕事に就いたかと言えば、小学生のころにさかのぼります。僕が生まれ育った信州は空気が澄んでいて星がとても綺麗でした。自然と天体観測に興味を持つようになり、天体望遠鏡で毎晩、空を眺めていました。

特に土星の輪っかや月のクレーターは印象的で、何度見ても飽きません。見えないので普段意識することはありませんが、地球には分厚い大気があってこれがすごく揺

らいでいるのが、望遠鏡を覗くとわかります。

月や星といった天体は、同じように見えて、少しでもコンディションが変わると、途端に見え方が変わるんです。世の中の多くの人が目に見える事象に意識が向く中で、僕は見えない雰囲気などに自然と関心がいくようになったきっかけだったように思います。

家庭環境も特殊でした。信州はもともと明治以来、絹織物などの産業のおかげで先が器用な県民性だったため時計や精密機械工業が盛んでした。僕の父もご多分に漏れず、精密機械工業の工場を経営していて、よく仕事を手伝っていました。

お小遣いは与えられず、働いて製品を仕上げると、プリント基板1枚当たり50銭などといった相場で働いて、欲しいものを買っていました。もちろん、望遠鏡もそうで

数万円するから子どもにとっては気の遠くなるほどの長い道のりを稼ぐ必要があります。  
した。

これが遠因となつて経営感覚はすぐ身につきましたが、一方で、一所懸命に働いてもそうでなくても同じ給料の職場環境には最後まで馴染めませんでした。公務員という仕事が合わなかった理由の1つになっているかもしれませんね。

毎晩星空を眺めつつ、天体関連の本も相当、読み漁りました。好きが高じたのか、小学生の時点で大学生が読む天文書も読んでいたほどです。そうした環境から、日常においても常に宇宙から地球を俯瞰して見る、変わった子どもだったように思います。

「今、見ている星の光は数年〜長いと数百年かかって、ようやく届いてる。とする  
と、もうすでに消滅していたとしても、僕は気がつくことができないうんだ。これっ

て、見ているものは存在しないかもしれないってこと!? 一体、どうなってるんだろう!!!」と、そんなことを考える子ども時代でした。好きになったバンドの歌に「今まで見てきたものが、もし全てデタラメだったら〜」というような歌詞があり、とても共感したのを覚えています。

目に見えているものや常識だと思っていることは、実は思い込みや幻想であることが多くて、実はこの世に存在しないモノだったりする、この感覚が僕の人生を貫いています。

現代の日本においては、世の中の多くは学校教育という刷り込みと洗脳、そして日々見かける広告や宣伝は人々を思い込ませる方向に拍車がかかり、日本人が思考停止する力がとても強く働いているように感じています。

少し話が脱線しましたが、高校時代に湾岸戦争が勃発したとき、もともと宇宙視点だったので大気汚染や地球温暖化といった地球規模の環境問題に自然と目が向くようになりました。そして環境学が学べる大学を調べて受験し、緑地環境学を専攻することになりました。

ただ、そこでは地球規模で物理的な環境を学べるというよりは、主に都市の緑地環境を研究するところだったので、おのずと都市計画を専攻する流れになります。実は当初、思っていたこととは少し違うことを学んだ形になりました。

そして学部学科の卒業生の大半は国や地方自治体の上級試験を受けて、キャリア官僚として働く流れがあったので、僕も自然とそれに乗り結果として公園や都市緑地の専門の公務員になったのです。

ちゃんと考えて、自分で進路を決めてきたように見えて、意外と行き当たりばったりののが僕の人生だと思えます。人間万事塞翁が馬という言葉がありますが、僕はこの言葉をとても強く支持しているのです。

「公園づくりをする公務員って一体、何をしているの？」と想像しにくいと思うので、少しだけ詳しくお話させていただきますね。

主な仕事はどこにどんな大きさや形の公園をつくるかを計画して、基本的な中身を設計したうえで具体的な施設を配置（実施設計）していきます。

実施設計をもとに図面を作成して、材料や遊具などでいくらかお金がかかるかを積算します。それをもとに入札を行い、契約する工業者が決まるといよいよ工事開始です。工事現場では監督として全体を見渡し、工期までに滞りなく終わるように見守り

ます。

公園が完成すると、設計書や図面どおりに仕上がっているかを、上司と一緒にチェックします。ここで指定した材料と異なるものを使用していたり、量が不足していたりした場合などは手直しが行われ、合格して晴れて開園を迎えるのです。

公園づくりに携わる人をテレビ番組の制作にたとえると、僕がしていた仕事は予算管理・出演者キャスティングやギャランティの交渉、制作スタッフの割り振りなど、番組の大きな枠組みを決めるプロデューサーです。

そして工事業者の現場監督とは、プロデューサーが決定したその枠組みのなかで、ロケ・編集などを現場でおこなうディレクターと言えます。

開園後の公園を利用する人たちは差し詰め、出演者ではないでしょうか？ デイレクターは子どもからお年寄りまで、男性も女性もさまざまな立場の公園利用者が楽しめるように、エスコートする役割と言えます。

僕は現在「住まい選びの総合医」として、独身の方や若いご夫婦、子どもがいるご家族、そして退職をして穏やかな老後を過ごしたい方など、さまざまな立場の人が心底、落ち着いて過ごしたり、人生をより豊かに楽しめたりする住まいに出会えるよう、エスコートをしています。

また、プライベートでは夫として、長男と長女の父として一家族のプロデューサー的な役割を担っています。人生全般において目指しているのは、ご縁があつて僕の周



りにいる人たちが「あるがまま」でいられる「居場所」をつくることです。

現代日本は「自分にとって本当に必要か？」という根本的な問いかけが抜け落ちて、テレビCMやチラシ、そしてネット広告といった企業が消費者の購買意欲を掻き立てるものに煽られてその場の「ノリや勢い」でモノを買っているように感じます。

住宅購入も実はまったく同じ状況に陥っているのです。新築マンションのモデルルームや住宅展示場、そして住宅のテレビCMなどは「この家が欲しい」というイメージを鮮烈に植えつける、いわば「洗脳」状態を日々、創り出しています。

「自分や家族はこれから数十年先を見据えて、どんなライフスタイルで、どんな家に住みたいか」という自分軸がないまま、ネットやチラシでたまたま見かけた物件を見に行き、その場のノリと勢いで将来、売れないゴミにしかならない可能性がある住宅を、巨額の借金をして購入しています。

自立した大人というのは「なんのために生きるのか」「どういう人生を歩みたいのか」という自分軸をしっかりと持ち、決して周りに流されることがない人です。僕は住まい選びを通じて、人生の自分軸をしっかりと構築できるよう、エスコートをしているのです。

現代日本社会には「空気を読む」という言葉がありますが、企業は商業主義に則り日々、この空気を醸成しているのです。生きることか、人生についてあまり真剣に考えず、浅はかな思考で生きてきたいいわゆる軸のない人は大人子ども関係なく、みんな

な空気に騙されます。

今回の本では、僕がこれまで公務員や経営者として培ってきた視点をもとに、子育てと住まいについて書いてみたいと思います。既にお気づきかもしれませんが、僕は児童心理や子育ての専門家ではありません。ごくごく一般的な家庭の父親目線でお話しさせていただきます。

僕は信じています。

「子育てに成功も失敗」もありません。

誰がそれを評価するのか？ いつの時点で成功か失敗かを判断できるのか？ 誰も

明確な答えなど明示できないのではないのでしょうか。

この本は、僕自身が「あるがままに感じてきたこと」を、皆さんとシェアする目的で執筆したものです。子育ての正解を論じるつもりは毛頭ありません。ぜひ肩肘を張らずにゆったりとした気持ちで、エッセイのような小説のような、そんな感覚で読み進めていただければ幸いです。

一般社団法人 住まい選びコンシェルジュ協会 代表理事

山田 剛司